

四谷の

千枚田だより



第 155 号

や木の葉、ササ、果実、ワサビの葉など、シキミ以外は何でも

ニホンジカ

本宮山と茶臼山を分布域とした二つの個体群が拡大したものと推測する。

平成五年、設楽町誌・稲武町史(自然)に編纂した哺乳類では本種の出現はみられなかったが、その後、設楽町の鹿島山において出現情報があり当地への拡大が危惧された。四谷地内において平成十二年に鞍掛山(通称・遠望)を確認、当分の間見られなかったものの平成十七年頃から目視情報が相次ぐと同時に分布域が急速に拡大された。現在は鳳来・新城地区のほぼ全域まで急速に拡大してしまった。

一方、本宮山を分布域とした群は茶臼山個体群よりも早期から拡大傾向にあった。特に作手地区の拡大が顕著である。

本種は跳躍力が大きく、田んぼへのイノシシの侵入を防ぐトタン板や電気策など軽々と飛越し被害を及ぼす害獣であり、住民の多くが「シカが出たら百姓も終わりだ。」と嘆いている。

本種の食性調査の結果、稲穂、草

食べる。

林道などで複数の雌を見かけることがある。晩秋の交尾期になると雌は「フイー」と鳴き声を発し求愛を行う。雌は二頭の仔を産む。

雄の角は毎年生え変わり年ごとに角の枝が多くなり四年の成獣では四枝にもなる。角の生え変わりは二本同時でなく片方ずつ変わる。これは、敵を威嚇するためでもある。

イノシシ

神経質で警戒心が非常に強い。また、学習能力は(彘)より遥かに優れている。

雌成獣は十二月頃から約二か月間が繁殖期で発情は約三日で終わる。交尾した雌は次の発情雌を求めて徘徊、交尾を繰り返す。その間、餌も摂らずに奔走するため、発情期の終わる春頃にはかなりやせ細る。出産は年一回、平均四〜五頭で、稀に秋にも出産するが、これらは冬の繁殖に失敗した個体である。

平成十二年頃から里地への出没が見られだし、その後、年を追うごとに分布域の拡大が顕著に表れ、現在では市街地を除くほぼ全域に出

没、農作物の被害や道路の法面の崩壊、人家の屋根への落石被害など、眼に余る被害が頻発している。

本種の個体数の拡大要因は概ね二つの説がある。一つは平成十年頃からキツネが疥癬病(チンパ)の蔓延で短期間のうちに壊滅状態までに陥った。本種のウリ坊(生後四ヶ月半で体毛がシマウリに似ている。)を食べる天敵であり、個体数の調整に益獣として貢献してきた。

二つは平成十二年頃から急速に個体数の拡大が見られた。その要因は「イノブタ」の増大にあると推測する。(彘)は県獣害対策指導員として本種の生態や動向、個体数の調整に取り組んでいる。その結果を踏まえ、考察すると個体数の拡大は家畜の豚が何らかの理由で野に放たれたか、逸脱し、イノブタ化したことと思われる。理由として①年中ウリ坊が見られることは春仔ばかりでなく季節を問わず生まれている②七頭から八頭と多産である。これはブタの先祖はイノシシであり、出産回数を多く多産系に品種改良された種が家畜のブタである。③捕獲された個体のうち豚とイノシシが交雑されたと思われる個体が多く捕獲される。④生活環境が野生イノシシと異なってきた。平成十二年頃までのイノシシは山地奥山に寝屋

を持つていたが、現在では人家の数十メートル離れた休耕地のススキ原に点々と寝屋を持ち昼間でも姿を見せる。⑤餌場を山野から里地の農作物を主食としている。①から⑤まで(彘)の体験、観察結果を纏めてみた。はじめに、本来の生態を述べたが現在とは大きな違いがあることが解かる。



ニホンザル

昭和三十年代は、遠望や川売の山猿といって何処にでも居た訳ではなく、川売の山続きの玖老勢あたりで稀に見た程度である。作手地区の南部、新城の野田地内などには本宮山を分布域とする個体群の生息が見られたが、農作物等の被害はあまり聞くことはなかった。

昭和四十年代になると、分布域が拡大されるとともに林地を利用した「しいたけ栽培」などに被害が出

始めたが、農地までの出没は稀で農作物の被害までには至らなかった。身平橋の入屋は「しいたけ栽培」を生業としていたが、被害の拡大から生息のみられない寒狭川の湯島橋を渡った愛郷地内でしいたけ栽培を開始した。その後、順調な経営が続いたが、昭和五十年には一帯が寒狭川を越し、食害が頻発。廃業に至った。事例として平成十七年には小滝・守義地内にも出没がみられ、その後どんどん拡大している。

昔のサルは「ズクシ」を食べとつたが、今じゃあ贅沢になって人並みに何でも食べるようになった。それでも、福井さんのおかげで最近では爆竹があまり鳴らなくなったような気がしないでもない。

三遠南信交流会東三河編

三遠南信住民ネットワーク協議会とは、三遠南信地域の事業展開の可能性を探り、地域住民相互、地域住民と行政、経済界をつなぐプラットフォームとして発足。その実質的な役割を実現していくために当協議会が設立された。

六月二十五日、三遠南信交流会東三河編が四谷の千枚田を会場に開かれた。午前中はエクスカージョンとして千枚田散策、午後は身平橋集会所でそれぞれの活動拠点の課題、

問題点などを議論した。
農業学習

七月七日、福井県勝山市の私立かつやま子どもの村小中学校の小学生二十三名が千枚田を訪れた。



この学校は平成十年に福井県勝山市の誘致を受けて公立学校の校舎をつかった日本で初めての私立学校で、全国から志望する全寮制（週末帰省あり）で自己決定・個性化・体験学習を基本原則とした自由学校である。今回の訪問は子どもたちがネットで四谷の千枚田を選定、農業（稲作）についての勉強が主目

的で、ほとんどの生徒から稲作栽培の質問が続出した。この学習には市鳳来地域整備課の職員と（舜）が対応した。

郷土研究会

七月九日、設楽原歴史資料館を会場に新城市郷土研究会（月例）が開かれ、講師として「地域おこし」四谷の千枚田からくを題材に九十分の講演を行った。地域の宝としての活動、市、県の顔となったものの地元の苦勞、棚田保全の難しさ等々、本音を語り、会員から暖かいエールを頂いた。

アフリカの農学研修者の視察

七月十日、JICAの集団研修をお世話する名古屋大学農学国際教育協力研究センターは「アフリカ地域 稲作振興のための中核的農学研究者の育成」の技術研修を実施している。アフリカは現在、稲作振興に大きな期待を寄せ、今回、この研修に「四谷の千枚田」を選定。ケニア連邦共和国を始め十二か国、十八名の農学研究者が熱心に技術研修を行った。質問の事例・株間が狭いが大丈夫か・収量は・水を温める工夫は・手植えか、機械植えか・等々、約二時間を稲作技術の習得に真剣に取り組んだ。最後に（舜）の

メッセージとして大変勉強になった。国に帰り、今日学んだことを実践する。ぜひ、アフリカに来て下さいと誘われた。ぜひ、アフリカへと言われても、ちょっと、玖老勢のサークルKへ行くような簡単な訳にはいかない。



行 平成二十八年七月二十日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責 小山舜二
発